

早期発見が重要な子宮頸がん

《子宮頸がん》
子宮の入り口である子宮頸部にできる悪性の腫瘍です。日本人に多く、発症には性交によるウイルス感染が関係しており、最近では性交経験の低年齢化に伴って、20代での発症も増えています。

初期には無症状ですが、進行すると不正出血（月経時以外の出血）や性交後の出血がみられることがあります。
治療は、タイプや進行度により、手術、抗がん剤、放射線などさまざまな方法があります。

早期に発見すればほぼ完治が期待できるので、定期検診が大きな意味をもつ病気といえます。

《子宮体がん》

子宮内膜にできる悪性の腫瘍で、発症にはホルモンバランスの乱れや出産経験の有無が関係するといわれます。かつては日本人には少なく、子宮がん全体の1割程度でしたが、出産数の減少や食生活の欧米化に伴って増加傾向に。また、好発年齢は50〜60代といわれていましたが、低年齢化しています。

子宮体がんでは、比較的初期にも不正出血などの症状がみられることがあります。

女性のためのメディカル情報

mom's Clinic

第11回「子宮と卵巣の病気」



誌上クリニック「mom's Clinic」院長 矢吹有里先生

整形外科専門医。ロコモアドバイザー。東京女子医科大学卒業後、慶應義塾大学整形外科教室に入局。現在、東京都済生会中央病院整形外科に勤務。女性が心身ともに美しく健康な人生を送れるよう医学的な立場からサポートしている。

仕事や家事、子育てなど、毎日頑張っている女性たちへ！mom's Clinicでは毎月、女性の健康づくりに役立つメディカル情報をお届けします。今回は、女性特有のデリケートな臓器である、子宮と卵巣の病気についてお話しします。

女性の大切な機能をつかさどる子宮・卵巣の病気とは？

症状が出ないこともある子宮や卵巣の病気。

子宮や卵巣の病気にかかる女性には、近年増加傾向にあります。晩婚化が進み、出産年齢が上がってきている一方で、初潮年齢は低年齢化。多産が当たり前のだった昔に比べれば、子どもを産まない人や高齢出産も増えています。病気が増えている背景として、このような子宮や卵巣を取り巻く環境が大きく変化していることが考えられます。

子宮や卵巣の病気が、初期症状が比較的軽いため、「ちょっとした便秘や腹痛かな?」「いつもの体調不良かな?」と思ってそのままやり過ごしてしまうケースが多いようです。注意したい病気を紹介していきます。

《子宮筋腫》

子宮の筋肉に硬い瘤のような腫瘍ができる病気です。腫瘍のほとんどは良性ですが、まれに悪性の肉腫などに変化するものもあります。30代以降の女性の約3割に存在し、女性ホルモン（エストロゲン）の影響を受け

て大きくなり、閉経すると小さくなるといわれています。大きさは小さいものから子どもの頭ほどの大きさのものまで、さまざま。小さいものならほとんど症状はありませんが、子宮の内膜にできたものが大きくなると過多月経などを引き起こし、貧血の原因となります。

生理痛が強い、貧血などの症状が重い場合や筋腫が大きい場合は、ホルモン剤や低用量ピル、鎮痛剤などでの対処や、筋腫または子宮全体を切除する手術を行います。腹腔鏡による手術も可能となってきました。

《子宮内膜症》

子宮内膜や内膜と似たような

組織が子宮内腔以外にできる病気です。月経のたびに剝離・出血を繰り返す、体内にたまっていきます。これが卵巣に発生し、古い血液がたまってできたものは「チョコレート嚢胞」と呼ばれ、卵巣がんへ移行する危険があるといわれています。

症状としては強い生理痛、経血量の増加、生理時以外の下腹部痛、腰痛、性交痛などがみられ、不妊の原因となることわかつています。

治療には鎮痛剤や低用量ピル、ホルモン剤、漢方薬などの薬物療法と手術療法があり、現在は、体への負担が少ない腹腔鏡手術と薬物療法を組み合わせた方法が広く行われています。



定期検診で見つけない卵巣嚢腫と卵巣がん。

初期にはホルモン剤による治療が行われることもありますが、基本的に手術や抗がん剤などによる治療が必要となります。子宮頸がんと同様、早期に発見すれば治療率の高い病気です。

《卵巣嚢腫》

卵巣にできる良性の腫瘍です。卵巣に水や脂肪などがたまり、瘤のように腫れますが、その原因についてはよくわかっていません。卵巣嚢腫は自覚症状がほとんどなく、なかなか気づきにくいのが特徴です。ただし、腫れた卵巣が根元からねじれたり破裂を起したりすると激しい腹痛があり、緊急手術が必要となります。

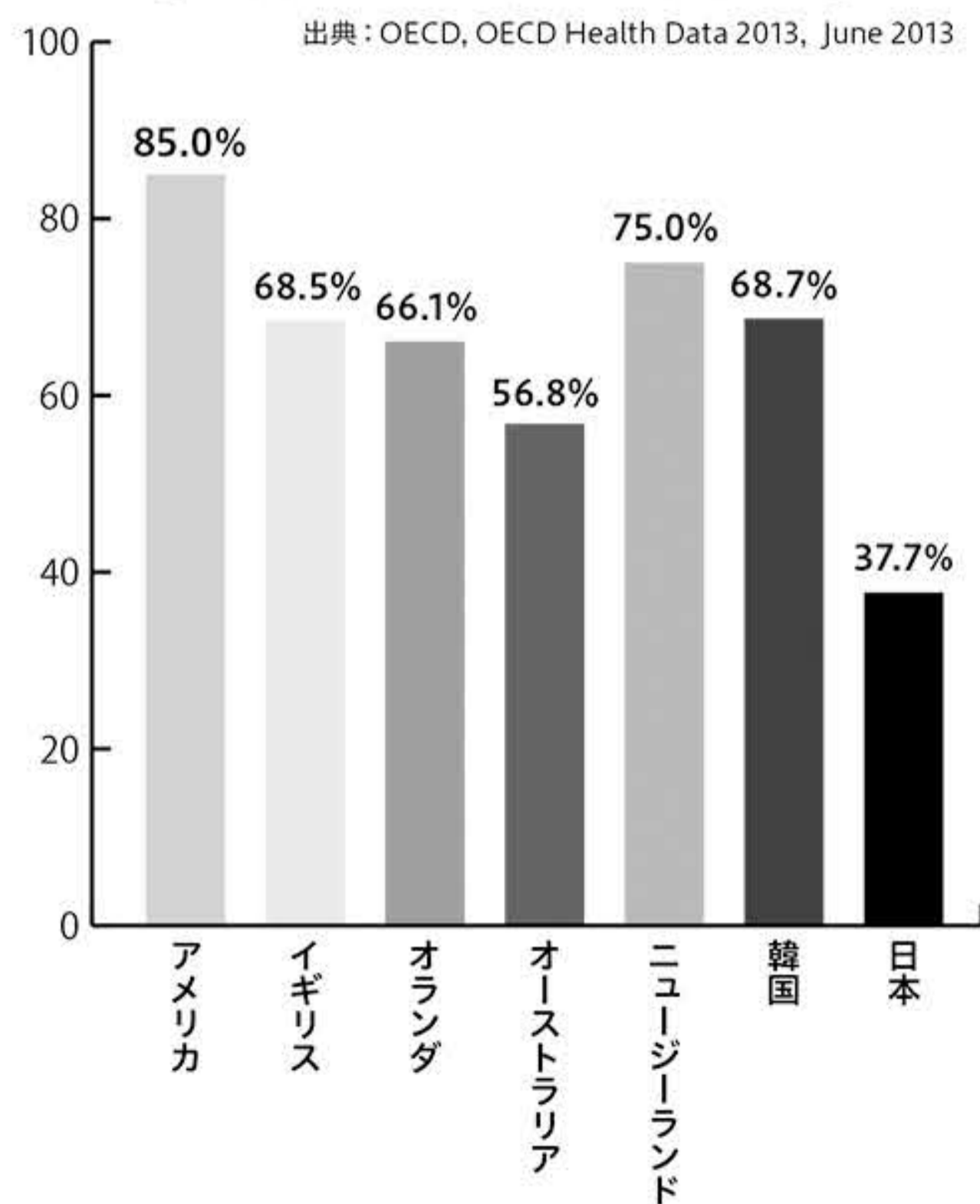
一般に小さいものは経過を観察しますが、直径6〜7cm（鶏卵くらいの大きさ）を超えたら手術で摘出したほうがよいといわれています。

《卵巣がん》

卵巣にできる悪性の腫瘍です。卵巣がんは、これといった自覚症状がないのが特徴で、おなか膨れたように感じて受診したときには、すでに腫瘍が相当に大きくなっているケースがよくあります。

【子宮頸がんの検診受診割合】

出典：OECD, OECD Health Data 2013, June 2013



卵巣は体の奥にあり、直接細胞をとって調べるのができないので、診断のためには超音波やMRI、腫瘍マーカーなどによる検査が必要です。
治療は、腫瘍のタイプや進行度によって、手術、抗がん剤などが選択されます。早期発見が決め手となるので、30歳以上で出産経験がないなどリスクの高い人は、積極的に定期検診を受けるようにしましょう。

子宮や卵巣の病気を日常生活で予防するのは困難です。病気を重症化させないために、体に異常を感じたときは早めに婦人科を受診してください。病気の発見が遅れないように、定期的に婦人科検診を受けることも大切です。

今月の重要ポイント!

日本では婦人科検診の受診率は4割程度に過ぎず、世界でも最低レベルとされています。時間が無い、婦人科診察にためらいがある、症状がないなどが、検診が定着しない主な理由のようです。しかし、私たち女性は、初潮から閉経後も含めて、生涯にわたり子宮や卵巣と共に生きていきます。20歳を過ぎたら、定期的に婦人科検診を受け、「自分の体は自分で守る」という意識を高めましょう。